

就業力の可視化①

「主体性とコミュニケーション能力がキーファクター」



大学教育総合センター 市村 光之

「就業力と大学教育」(AP/FDニュースレター創刊号)では、主体性とコミュニケーション能力が課題解決力などのジェネリック・スキルを發揮するキーファクターであることを説明しました。では、学生たちは実態としてどのくらいのジェネリック・スキルを持っているのでしょうか。大学教育総合センターでは平成25

年度より、就業力を測定するアセスメントとしてPROG(河合塾とリアセック社が共同開発)を希望者に実施し、就業力の可視化を試みています。このアセスメントでは、リテラシーとコンピテンシーの2側面から就業力を測定します。

知識を活用する 主体性が求められる

《リテラシー》は、知識を習得し、それらを活用して課題を解決するためのスキルになります。たとえば、情報を読み取り、分析し、結論を導く力であり、学び続ける力を含みます。過去3年の測定の結果、本学は7段階評価でレベル6点台を維持しています。リテラシーは大学入試の偏差値に比例する傾向がありますので、本学学生の学力に見合う結果です。

リテラシーは①情報収集力、②情報分析力、③課題発見力、④SPI(言語処理能力)、⑤SPI(非言語処理能力)の5項目で測定しています。本学学生は全項目とも全国平均を上回っていますが、①情報収集力が他項目に比べ低く、全国平均との差も少ない傾向にあります。与えられた情報を処理する能力は十分にあって、問題意識を持って自ら情報を取りに行く「主体性」に改善の余地があると予測できます。

集団活動からの学びが 就業力を向上させる

《コンピテンシー》は、経験から身に付ける行動性向であり、学業のみならず、サークル活動やアルバイトなど社会集団における他者との関わり合いを通じて培われる能力です。いかに学力があっても、状況を理解し、周囲とうまく関係を取り結び、働きかけられなければ課題は解決できません。1年生の測定結果を比べると、全国平均がレベル3点台の前半であるのに対し、本学学生の測定結果はレベル3点台の後半で、リテラシーほどの差はありません。社会人に求められる行動性向の完成度合いは、学力に係らず大学生のスタートラインでは全国的にほぼ同じということでしょう。

コンピテンシーは①対人基礎力、②対自己基礎力、③対課題基礎力の3つのカテゴリーで測定されます。ある私立大学で測定結果を共分散構造解析したところ、対人基礎力の強化により対自己基礎力が伸び、その結果、対課題基礎力の伸びに繋がることがわかりました(リアセック社提供「基礎力育成事

例」より)。対人基礎力またはコミュニケーション能力が、コンピテンシーを伸ばすカギなのです。本学の測定結果と全国平均とを比べると、親和力や協働力などの「対人基礎力」の差が少ない傾向にあります。視点を換えると、対人スキルを向上させれば、コンピテンシー全般の大幅な伸長が期待できそうです。

学業においてコンピテンシーを強化するには、講義による知識付与に加えて、グループ・ディスカッションやPBLなどのアクティブ・ラーニング、さらにそれらの組み合わせを換える反転授業などが考えられます。大切なことは十分なリフレクションの機会を設けることです。たとえばグループワークの場合、①集団活動を体験させるだけでなく、②ワークを通じた他者との関係性を省察させ、③ディスカッションやレポートによりそれらの経験化・定着を促し、④次のワークの機会に改善点を実践させる。その仕掛けを作り、振り返りのサイクルを回すことで対人基礎力を強化できます。